

本多静六通信

第14号

発行
本多静六博士
を記念する会

自然環境の父

— 本多静六博士のこと —

前環境省事務次官 太田 義武



太田義武氏（本多静六生誕地記念園にて）

総理官邸勤務を二度経験した。その二度目の
ときの上司が梶山静六先生（官房長官、茨城県
出身）である。『愛郷無限』を政治理念とする
この政治家は、仕事の面での厳しさには格別な
ものがあつたが、普段は爽やかでやさしさに溢
れており、お仕えして大変気持ちのいい政

治家だった。官房長官というポストは外部には
想像できないほどの激職で、いわば分単位の時
間に追われた仕事をしている。それでも時には
雑談にのびてくれる。

あるときお互いの名前の由来が話題になつ
た。その際長官を前にして私の頭に浮かんだの
が本多静六博士である。同じ名前である。しか
も極めて珍しい名前。どこかにつながりがある
のではないかと思ひ、「官房長官、林学者の本
多静六博士という方を御存知ですか」と尋ねた。
すると「知っているよ。わが国初の林学博士で、
確か明治神宮や日比谷公園を創つた人ではな
かつたかなあ」という返事。このようなお尋ね
をしながら、私は本多静六博士についてはその
名前程度しか知らなかつた。明治神宮といえ
ばお正月には必ずといっていいほど参拝してい
るし、日比谷公園に至ってはほとんど毎日お世話
になつている。この時もちと勉強する必要があ
るなあと思つた。

ほどなく人事異動があり、私は日比谷公園に
面する建物に移ることになった。幸い私の部屋

は上位の階にあつたので、部屋からは日比谷公
園の隅々まで眺めることができた。疲れたとき
や考えことを纏めるときなどには、よく眼下に
広がる公園を眺めたものである。また昼食時に
は公園内を散歩したり、あるいは公園内を通り
抜けて銀座方面に行くこともあつた。その際に
決まつて通るのが「首かけイチョウ」の大木の
前である。近道だつた。しかし私は、無意識の
うちにその前を足早に通り過ぎていたと思う。
長州藩の上屋敷があつたりするなど数々の歴史
の舞台となつただけに、誰かがここで首吊り自
殺でもしたのではないかと漠然と思つていたか
らである。

今年（二〇〇三年）は日比谷公園が開園して
丁度一〇〇年になる。新聞やテレビなどでこの
公園の由来や静六博士のことが盛んに報じられ
ている。私は、今は亡き梶山官房長官との数年
前の会話を突然に思い出した。そして荏苒日を送
つてしまつた自分に咎をあてて叱りたい思い
であつた。

遅まきながら本多静六博士について調査、勉
強を開始した。あちこちの図書館に通い、関係

目次

- 本多静六と茂木邦吉 清水公園第二公園にまつわるエピソード
- 千葉県野田市秘書広報課 北野 浩之…4
- 日本初の林学博士を生む原点となつたドイツ留学 ―ザクセン州ターラトを訪問して―
- 菖蒲町教育委員会 渋谷 克美…9



本多静六設計による日比谷公園
明治36年6月1日開園の日本初の洋式公園。平成15年6月開園100周年を迎えた。昼休みともなるとサラリーマンやOLたちがお弁当を広げつつるぐようすがみられる。



ビル群に囲まれた日比谷公園は、まさに「都会のオアシス」とよぶにふさわしいものがある。

の役所の古い資料あさりも試みた。そしてまた、博士の生誕の地の埼玉県蕨市からも多くの資料を送っていただいた。またこれらから得た知識をもとに出来るだけ多くの現地を尋ねることもした。その結果は、環境行政を担当してきた自分がいかに環境に、特に自然環境に無知であるかを思い知らされることになった。本多静六博士は蕨市や埼玉県の人であるばかりでなく、日本を代表する、いや世界的な林学者であったのである。

☆☆☆☆

本多静六博士は、日本の自然公園や都市公園の整備に大きな貢献をされた。特に現在、名公園といわれているほとんどの公園の造園や改修に関与されている。しかも単に技術者としての関与ではなく、人間と自然、あるいは人間と環境について、哲学、社会学、経済学さらには人間学などの観点から、深い洞察をもってこれにあたられた。

興味深い事実も次々とわかってきた。日比谷公園の「首かけイチョウ」は、道路拡張に伴い伐採されそうになった大銀杏を静六博士はその首をかけても移植を成功させるといつてついに遣り遂げたこと、そしてそれ故にこの名前がつけられたこと、明治神宮の木々は「天然更新」という考え方を取り入れ、シイ、カシ、クスノキを中心とした常緑広葉樹で構成したこと（ほとんどの人が天然林、自然林と思うほど、これが完全に成功している）、その際当時の大隈総理

から杉林にすべしとの話があったが、これに対し杉林は適切でないことを科学的に説明し、納得してもらったこと（もし杉林になっていたら都心における杉花粉症はもっとひどくなっていたのではないかと思う）、野辺地に渋沢栄一とともにわが国初の鉄道防雪林を創ったこと、今では東京都民の水嚮となつていいる奥多摩の水源地の育成を図つたこと、等々。今日我々がその恩恵を受けている数々の分野の事業にかかわつていたのである。

「人生即努力、努力即幸福」をモットーとした本多静六博士は、一八六六年（明治維新の二年前）、武蔵国埼玉郡河原井村（現南埼玉郡蕨市）の折原家に生まれた。私はこの偉人が生まれ、育つた蕨市を是非尋ねてみたいと思うようになった。



明治神宮南参道の一の鳥居。鳥居をくぐると都心とは思えない清々しい空気が体全体をつつんでくれる。

☆☆☆

六月。菖蒲町は、花菖蒲、カキツバタ、ニッコウキスゲ、そしてラベンダーの花の中にあつた。時期によつてはこれにフジやハギの花も加わるのだらう。まさに花の町である。東京から電車と車で約一時間のところ、比較的近い。東北新幹線と上越新幹線が分かれる三角形の中に位置する。ここがわが国初の林学博士、世界の本多静六博士の生まれ故郷である。博士の生家の石の門、幸福寺という通つた学校、子ども頃のよく遊んだといわれる幸福寺の前のサイカチの老木、そして本多静六記念室にある数々の文献や遺品、どれも印象深く、感動的であつた。

明治神宮の鬱蒼とした森の中に御苑があり、またその中に池がある。そこでは五月や六月になると花菖蒲やカキツバタが一斉に咲き始める。菖蒲町と優劣を競うのではと思うほど見事である。都心とは思えず、かつ美しく私の最も好きな場所である。私はこの花菖蒲やカキツバタは、本多静六博士がその出身地の菖蒲町から移植したものではないかと思つている。

本多静六博士もやはり『愛郷無限』ではなかつたのか。いやむしろ『愛郷無限』の先輩ではなかつたのか。

☆☆☆
もう一つ付け加えたい。

静岡県掛川市に宮城まり子さんの運営しているねむの木学園がある。障害をもっている子どもや大人の施設で、長い間おつきあいをさせて



園長の宮城まり子先生（左）といっしょに花菖蒲を植える中山町長。「吉行淳之介文学館」のすぐそばに「菖蒲町坂通り」が誕生した。



ねむの木学園への花菖蒲贈呈式であいさつをする中山菖蒲町長（左）

いただいている。その土地は百ヘクタール近くもあり、その広大な土地は季節季節に応じた種々の花が咲くように工夫されている。一歩その中に入ると、まるで童話の世界に入り込んだのではという錯覚にとらわれる。メルヘンの世界である。まり子さんの好きな花でここになかつたものが、花菖蒲やカキツバタ、そしてニッコウキスゲである。うれしいことは私の菖蒲町訪問をきっかけに、菖蒲町とねむの木学園の交流が始まつたことである。九月にはこの交流の一環として中山町長さんが同学園を訪問され、たくさんの花菖蒲やアヤメ、ラベンダーが贈られ、そして移植された。その近くの通りは「菖蒲町坂通り」と名付けられたとのことである。子ども達は来年を大変楽しみにしているといふ。絵の好きな子どもが多いので、絵を書くのを楽しみにしているのかも知れない。

本多静六博士のことが契機となつて、話が意外な方向に進展している。私にとつても望外の喜びである。

「ねむの木学園」について

ねむの木学園は、日本で最初の肢体不自由児療養施設で、宮城まり子さんにより昭和四十三年静岡県浜岡町に創設されました。ハンディキャップを持つた子供たちに学ぶ場を与えてあげたいという心から創られた学園も、今では掛川市の山あいの集落に移転され、花と緑と福祉の里「ねむの木村」として、情熱にあふれた教育が続けられています。

本多静六と茂木邦吉

清水公園第二公園にまつわるエピソード

千葉県野田市役所

企画財政部秘書広報課 北野浩之

●清水公園の概要

清水公園は、今からちょうど百年前の明治二十七年（一八九四）年一月に開園した民設民営の公園である。

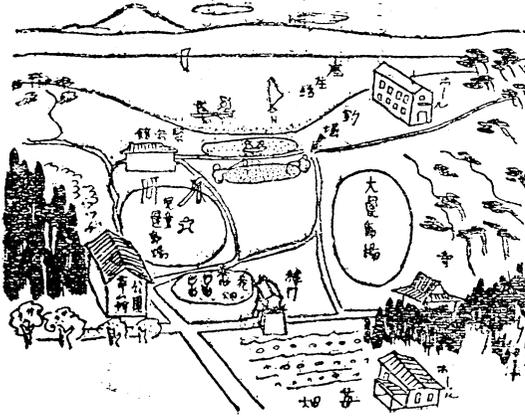
「千葉縣野田郷土史」（市山盛雄・昭和三十三年・長谷川書房）はその始まりを『清水公園は、明治二十七年一月柏家五代主茂木柏衛翁が、金乗院から五千五百余坪を千円の借地料前納で五十年間借地の契約をして、遊園地を建設、同年四月三日開園式を挙行して一般町民に開放されたものです。更に、茂木家一族に因って、無盡講睦会を結成して遊園地の維持費に充てることになりました。後、聚楽講と改めて、この遊園地を聚楽園と称していましたが、地名の清水によって、いつとはなしに清水公園と称するようになったものです』としている。

現在、公園を管理、運営している株式会社千秋社は、大正十四（一九二五）年、野田醤油株式会社（現・キッコーマン株式会社）の姉妹会社として設立され、昭和二十二年（一九四八）年に現在の組織に変更している。

開園当初の公園は、現在よりも規模も小さかったが、昭和初期に第二公園が整備されて、ほ

ば現在の形が造られた。昭和五十二年（一九七六）年には、日本最大級のポイント数を誇るフィールドアスレチックの開設、平成二年、世界初の噴水迷路、同十四年「花ファンタジア」の開設など、時代とともに確実に、観光客のニーズに応えた園内整備を行い続け、現在、その面積は約二十八万平方メートルとなっている。

春は約二千本のソメイヨシノや二万株のつつじ、夏はキャンパやバーベキュー、にじます釣り、秋は紅葉やフィールドアスレチックなど、一昨年園内にオープンした「花ファンタジア」とともに、現在でも四季折々の自然を楽しむ人たちが賑わっている。



「総武電車沿線めぐり」に描かれた第二公園

●第二公園設計は昭和初期

さて、清水公園の第二公園は、本多静六博士の設計と言われている。残念ながらそれを断定する資料はないが、「今の公園入口の碑の後ろに本多博士、昭和四年などと刻まれた石柱がみつてあった」（茂木義資氏談）という。では、文献等ではどうであろうか。

昭和五（一九三〇）年発行の「総武電車沿線めぐり」（総武探勝会編）には、『最近には林学博士本多静六氏（一八六六—一九五二）の設計に基き、五十萬圓の豫算を以て下図の様に大拡張を加える事となり、第一期工事は既に着手いたしました。四季の花とりどりの花園、いちご園、野球場、釣堀り、児童遊園地、ホール、公園事務所等の完成を見るのは、此処二三年後でありませう。此れが完成の暁は、関東一の大遊園地となると言ふのも過言ではありません』とある。また、前出の「千葉縣野田郷土史」には『第二公園となっている新公園は、昭和四年五月に学習院御在学中の北白川・朝香の両宮殿下が母狩に御来園になった際開園したもので、面積は四万余坪ですから全域では約五万坪になったわけです』とあることから、設計は、昭和四（一九二九）年以前であることは間違いないようである。

●設計依頼主を探る

では、誰がどういっいきさつで本多博士に設計を依頼したのか、最も肝心の部分であるが、



昭和初期の清水公園をPRするチラシ（野田市所蔵）



昭和12年に写された清水公園全圖（千秋社所蔵）



茂木邦吉氏 写真提供＝茂木義資氏

これも決め手となる資料がなく断定することはできない。

しかし、千秋社に勤め、昭和三十九(一九六四)年七月二日から同四十(一九六五)年六月十八日まで野田市議会議長も務めた茂木邦吉氏(一九八一―一九六九)の熱心な薦めにより、当時、野田醤油株式会社現在のキッコーマン(株)株式会社)第二代社長茂木七左衛門氏(一八七八―一九五〇)が本多静六博士に依頼した、という話を当時の関係者から聞いたことがある。今回は、この話を手がかりに、清水公園の第二公園が誕生するころのエピソードを調べてみた。

まず、茂木邦吉氏について、「ご子息である茂木義資氏(野田市清水在住)にお話を伺った。茂木家は、昭和二年に現在のNTT東日本野田があるあたりから、清水公園駅の近くに引越してきてきた。

邦吉氏は明治三十一(一八九八)年七月十五日に茂木勇右衛門家次男として野田に生まれ、大正十一(一九二二)年三月、東京農業大学専門部を卒業、同年四月から大正十三(一九二四)年三月まで東京府立農事試験場と東京府北豊島郡農会に勤務している。

その後、大正十四(一九二五)年四月から前述の株式会社千秋社に勤務、昭和二十(一九四五)年からは同社取締役を、同二十(一九四五)年五月から同四十一(一九六五)年五月まで野田市議会議員に連続当選。この間に市教育委員長、市議会議長など要職も歴任した。

昭和四十三(一九六八)年三月三十一日には、四十数年世話人を務めていた清水公園内の名刹・金乗院で得度式を挙げ、同年四月十日から金乗院の総本山長谷寺で正式に僧侶の資格を取得されるまでにいたったが、昭和四十四(一九六九)年七月二十五日、再生不良性貧血症のため日本大学板橋病院で逝去された。

ここで少し余談になるが、一昨年、茂木義資氏から一枚の写真をお預かりしていた。それは、古い写真から複写した写真ではあったが、バットやミットのような野球道具を持つ十三人の小学生たちと、教諭らしき一人の人物が写ったものであった。

裏面には、「明治四十三(一九一〇)年小学校六年生の時の野田で最初の野球チーム 監督 コーチ 橋田先生」とあり、写真の中に六年生当時の茂木義資氏の父親・邦吉氏が写っている。

ことから、各方面を調査した結果、撮影されたのは記載されている時期と違わないこと、そして場所が野田小学校現在の野田市立中央小学校であることが分かった。

しかも、写真を見ていただいた財団法人野球体育博物館(東京都文京区)の新美和子学芸員に「明治四十三年に小学生が野球道具を持って、チームで写っている写真は野球体育博物館にもなく、非常に珍しい」というコメントをいただいた。

さらに、「少年野球発祥の地」と言われる秋田県神岡町に問い合わせたところ、同町にも明治時代に撮られた野球のユニフォーム姿の小学生の写真はなく、日本最古級の少年野球チームの写真であることも判明した。この発見は、平成十四年十二月の新聞各紙で大きく報道された。話が、脱線してしまった。ここで、元に戻そう。

●本多博士と茂木氏の接点

茂木義資氏からは、そのころ、一枚の名刺を見せていただいた。本多静六博士のものであった。博士の肩書きは何もなく、名前の右側にやや色褪せてきたインクで「野島秋蔵氏を」紹介申し上げ候間よろしく願ひ上げ候也」と書かれていた。

菫蒲町史編さん室の渋谷克美氏によると、肩書きのない本多博士の名刺は珍しいものだそう、住所から推察して昭和十八(一九四三)年か

ら同二十七年一九五二年の間に使用されたものであるという。

名刺は、邦吉氏が直接本人から頂戴したもので、本多博士と茂木邦吉氏の交友を示す貴重な「品」といえよう。

では、茂木邦吉氏が本多静六博士と初めて会ったのは、いつごろであろうか。

ひとつの可能性としては、清水公園の設計時期が、昭和四年以前ということ念頭に置くと、邦吉氏が農大生時代から農事試験場等に勤めていた大正十三(一九二四)年三月までである。

残念ながら邦吉氏が農事試験場で林学を専門としていたかは不明であるが、義資氏によれば、昭和二年に現在地へ引越してきたときに、邦吉氏は家畜の糞尿を原料とした「天然ガス発生器」を作って庭に設置し、そこから得られるメタンガスに火を灯して、実際に利用していたという。

いづれにしても、両者とも「農林」という分野に携わっていたわけであるから、何らかの接点があったことは十分考えられる。

さらに、「林学」という観点から推察すれば、大正十四年から昭和四年ごろまでに接触している可能性が大きい。

株式会社千秋社は、現在でも清水公園の管理・運営を行っている会社であるが、それ以外の業務として飼料販売、そして三重県飯南郡飯高町青田一、二二六一番地に千二百町歩の広大な山林を所有し、杉や檜などを育成している。

昭和五十一年に公園内にオープンしたフイルドアスレチックの材木は、自社の山林の木を利用してあるものである。同社の役員は、この山林を数年に一度見回りに行く「山改」と言われる視察を行っており、邦吉氏も役員として参加している。

本多博士は、大正八(一九一九)年七月に帝國森林会理事・副会長に、さらに同十五(一九二六)年三月には帝國森林会長、昭和三(一九二八)年に日本庭園協会会長に就任するなど、林学や公園設計などの分野に幅広く活躍していた時期でもある。



昭和29年11月・山改を行う茂木邦吉氏(中央、帽子をかぶり杖を持った人物)写真提供=茂木義資氏



本多博士から邦吉氏に宛てられた手紙(千秋社提供)

このことから、大正時代後半から昭和初期にかけて本多博士と茂木邦吉氏は接する機会があり、邦吉氏から茂木七左衛門氏を通じて清水公園第二公園の設計を依頼したのではないかと考えることができる。

なお、今回の調査を行った中で、本多博士から茂木邦吉氏へ宛てた手紙二通の写しを株式会社千秋社の常務取締役である茂木七郎治氏から、見せていただくことができた。

二通のうち、一通は封筒がなく、また、残る一通も切手が剥離しており大変残念なことに、何年のものか不明であった。

野田市史編さん担当の宮崎等学芸員に解説していただいた結果、ひとつの手紙には、『本多博士に邦吉氏から送られた』「たくさんの重宝なもの」を早速使い、とても喜んでいる『

という内容で、十月三日付けのもう一方の手紙には、『一日大変楽しませていただいた。お兄さん(茂木勇右衛門氏)や柳氏にもよろしく伝えてほしい』と書かれていた。

●清水公園の設計図

最後に、本多博士が描いた清水公園の設計図がどこかにないものか、いろいろと調べてみたが、現時点では発見することができなかった。

しかし、昭和十二(一九三七)年に原図と思われるものから写し取った図面は、現在、株式会社千秋社に保存されていることを確認した。

この図は、当時の経理部長だった戸辺好郎氏により、平成四年に同社内から発見されたものであるが、これを描いたのは奇しくも手紙にも書かれていた、邦吉氏の兄にあたる茂木勇右衛門氏であった。

【参考資料】野田市制施行三十五周年記念市勢要覧／「金乗院のたより」第三号・昭和四十五年八月十五日号／「野田ロータリークラブ週報」故茂木会長追悼号・昭和四十四年八月十五日発行／「野田の歴史」市山盛雄・斎書房／「本多静六伝」武田正三・埼玉県立文化会館・昭和三十一年

【資料提供・取材協力】茂木資義氏・茂木七郎治氏・株式会社千秋社・野田市史編さん担当・菫蒲町町史編纂室・戸辺好郎氏・渋谷克美氏

【資料解説】宮崎等氏

本多静六博士ゆかりの地訪問

日比谷公園と明治神宮を見学

■日比谷公園の記念イベントに菫蒲町も出展

平成十五年度は十月十八日土曜日に、昨年同様、町バスを使って日比谷公園、明治神宮、そしてNHK菫蒲久喜ラジオ放送所のご協力を得て、NHK放送センターの特別見学という内容で実施されました。特に今回は日比谷公園開園百周年を記念したガーデンングショーに菫蒲町が出展していることもあって、



日比谷公園に残る開園当時の「水飲み」を見学しているようす

十八日の見学会となったものです。(ガーデンングショーは十月十八日から二十六日までの九日間開かれた)。

参加者は町民三十七名。午前八時に役場を出発したバスは、午前十時少し前に日比谷公園に到着しました。日比谷公園に着くと早速、案内役の町職員が先頭にたつて見学会が始まりました。開園当時から残されている街灯や水飲み、噴水などを中心に、広い園内をゆっくりひと回りして、四十五分程の見学を楽しみました。

■鳥居の側に建つ郷里のクスノキ

日比谷公園の見学を終えた一行は神宮外苑にある日本青年館で昼食を済ませ、明治神宮へと向いました。

本多博士が設計した境内林を散策した後は、南参道の一の鳥居のそばで当時の河原井村から献木されたというクスノキの木を見学しました。

明治神宮見学の後はNHK放送センターへ。放送センターでは収録中のスタジオの内部とスタジオパークを見学させて頂きました。

午後四時に渋谷の放送センターを出発し、午後六時少し過ぎに役場庁舎に無事到着しました。

末筆ながら、今回のゆかりの地訪問にあたりご協力を頂いたNHK菫蒲久喜ラジオ放送所の皆様をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

日本初の林学博士を生む 原点となったドイツ留学

―ザクセン州ターラントを訪問して―

訪問団事務局
菖蒲町教育委員会 渋谷克美

本多静六博士顕彰事業実行委員会と菖蒲町では、昨年度、ドイツの洪水被害により延期となっていた「本多静六ゆかりの地・ターラント訪問」を去る平成十五年十月二日に行った。ターラントは本多静六が明治二十三年に留学した町である。



訪問団に参加した皆さんとターラント町の皆さん（ゾマー町長・写真後列左から6人目、プロスフェルド博士・同列左から3人目）



ターラントの中心市街地は谷にそってひらけている

本多は、「ターラントは人口二千にも足りない一小市だが、いはゆる学校町で町の中央をワイセリッツという幅数間の川が流れ、山と渓谷の間の静かな美しい町である」と日記に書き残しているが、現在もまったくといってよいほど変わらぬ風景が保たれている。

今回の私たち訪問団は、中山登司男菖蒲町長を団長に、十四名のメンバーで九月二十九日から十月六日までの六泊八日の日程で、ミュンヘンからベルリンまで北上するルートをたどった。

一番の目的は冒頭に述べたターラント訪問である。以下、ターラント訪問のようすを中心に紹介したい。

■今なお残る昨夏の洪水被害の傷跡

九月二十九日に日本を発った訪問団一行は、翌三十日に本多静六が留学したミュンヘン大学を見学した後、ロマンチック街道、古城街道を北上してドレスデンへと向った。ターラント訪問の前日にはドレスデンの宿に入り、メンバー一同気を引き締めると共に翌日の訪問に備えた。日本を発つ前に数度に亘り先方と手紙の遣り取りを行い、万全の備えはしてきたつもりだが、やはり初めての土地ということもあって、期待よりも緊張が勝った感じがした。

十月二日木曜日、ホテルを午前九時に出発予定であったが、ちょうどその場へザクセン州独日協会のロータールさんが見えになり、私たちにドイツの地図をはじめザクセン州関係の資料を数種類提供してくださった。その後私たちは専用バスで、ロータールさんはご自分の車でターラントへと向った。

午前九時四十五分、どんよりとした曇空のもとターラントの中心市街地にバスは踏み入れ



本多静六が下宿した民家（手前）や教会（奥上）が当時の姿のままある

た。ターラントはドレスデンの南西約十五キロメートル、車で約三十分の距離にある。天気は今にも降り出しそうな空模様である。一行は駐車場にバスを止め、二百メートルほど離れた町役場庁舎へと徒歩で向った。

歩きながら町の様子をみる。「洋行日誌」にあるとおり谷あいのまちである。中央に幅数メートルの川が流れているが、あちこちが工事中である。まだ昨年の洪水による被害が完全に復旧されていないようである。建物をよく見ると、人の背丈以上の高さにつつすらと線がみえる。「ここまで水位が上がったのです」とロータールさんが話してくれた。

最初の訪問場所となった役場庁舎は、レンガ造りの四階建てで、窓越しに草花が飾られた瀟洒な建物であった。百年以上も前に建てられたものとは思えない外見であるが、やはり中に入ると歴史を感じさせるものが多く見受けられた。

表敬訪問は庁舎一階の会議室で行われた。会場にはゾマー町長をはじめ、今回の見学の案内をして頂くプロスフェルド博士、役場の観光課職員、独日協会のメンバー、そして大学関係者の顔ぶれが並んでいた。

テーブルの上には数種類の飲み物とコップが用意されており、「ご自由にどうぞ」ということだった。会見は、はじめにゾマー町長からの歓迎のあいさつ、続いて中山町長がドイツ語でお礼のあいさつを述べた。そして最後にプロスフェルド博士が、改めて本多静六の業績などを話しながら町の紹介などをしてくれた。

■留学当時の姿をそのまま残す学校、下宿屋

庁舎での表敬訪問が終り、外に出ると小雨が降り出していた。皆用意した傘を広げ、案内役のプロスフェルド博士の後に従った。間もなく一軒の建物に差し掛かり、「これが本多静六が下宿した建物です」との紹介があった。昨年の洪水被害による補修はほぼ終了したようである。「この二階に下宿していたようです。残念ながら中には入れません。現在売却物件となっています」とのこと。下宿した建物の後には、高台に立つ、本多静六がよく通ったという教会が見えた。

下宿屋の一軒おいた隣に留学先の山林学校があった。現在はドレスデン工科大学林学科の校舎として使われている。建物は本多静六が留学した当時とまったく変わっていない。むしろ洪

水被害の後の補修工事が行われたため以前より綺麗になっているようである。二階で三人の教授たちから林学科の授業内容の説明を受ける。さらに資料として、明治時代からの留学生名簿を頂いた。

この大学では現在約六百人の学生が林学を学んでいるという。今でも世界の先端をゆく研究が続いているようである。日本の大学とも情報交換を行っているとのこと。いずれにせよ、この大学はターラントの人々にとって町の誇りであるという。



本多静六が留学した当時の姿をそのまま残す建物は、現在ドレスデン工科大学林学科の校舎として使われている



本多静六がよく散歩に出かけたというハルタ村



ターラントの森 写真右下はハインリンヒ・コッタの墓



ターラント町役場庁舎

■各種の公共施設と「ターラントの森」を見学
 大学校舎を見学した後、続いて分館にあたるユーダイヒ館を見学。雨はいつの間にか止み、雲の切れ間に青空がのぞくほど天気は回復していた。

「ユーダイヒ」とは本多静六が留学した当時の山林学校の校長の名前である。分館は本館に比べ近代的な設備である。

ユーダイヒ館に続いて、青少年の教養・娯楽施設というクツベルハルという、展示スペースや音楽鑑賞、演奏スペースなどもつ施設を見学した。これら一連の施設はほぼ川沿いに並んでいる。

次いで高台にある十一世紀に築城されたという城跡を見学。観光係の女性が詳しく説明してくれた。午後一時をまわったところで少し遅めの昼食となった。

昼食会場は、ターラントの目抜き通りにあるシラーレックというレストランで、本多がよく利用した、と店主の話があった。外見は古い。中は清潔感にあふれ、贅沢な気分を与えてくれた。昼食会にはターラントのゾマー町長、プロスフェルド博士らの他、新たにザクセン州州議会議員のヴェロ氏も加わった。

昼食の後はターラント小学校を見学。日本と学制が異なるため、小学校には一年生から

四年生までが通っている。全校児童数は七十一人と少ないが、来年度は三十九人が入学予定とのことである。女性の校長先生の案内に従って校庭の花壇から順に教室内を見学。教室の一室には本多静六の母校にあたる三箇小学校から贈られた写真が多数貼ってあった。訪問団一行からは小さな歓声があがった。

午後四時、最後の見学場所である「ターラントの森」を見学。ふだんは車の乗り入れは禁止であるが、特別な許可によりバスで森の中心まで乗り入れることができた。森は元はザクセン国王の狩猟場だったという。訪れた時にはすでに紅葉も見頃をむかえ、落ち葉の絨毯の感触が実に心地よかった。森の中心地にあるハインリンヒ・コッタの墓をお参りする。コッタはターラント山林学校の創設者である。道を隔てた反対側にコッタよりはやや小さなユーダイヒの墓がある。両者とも山林学校の歴史上最も有名な人物である。

ターラントの森の見晴台に立ち、眼下にターラントの町並みを一望する。谷筋に沿って連なる家並み、谷の両側にせり上がる森、せり上がった頂上部は広大な畑となっている。日本では見ることのない、ドイツ独特の風景である。

ターラントの森からターラント市街に戻る途中にハルタ村を遠望する。洋行日誌に時たま出てくる、本多静六がよく散歩に出かけたという村である。白い壁に赤い屋根のそろった町並みが広大な田園風景にマッチしてヨーロッパらし



ターラント町役場での表敬訪問のようす。立ってあいさつをしているのがゾマー町長、右端はプロスフェルド博士

い眺めをみせていた。最初に着いた駐車場に戻ると時計は午後五時を指していた。夕暮れが迫っていた。谷あいにあるターラントは日のかげりが少し早いようである。駐車場で案内役を務めて頂いたプロスフェルド博士に何度も丁寧にお礼を申し述べ、訪問一行はドレスデンへの道を戻った。

■心のこもった温かな対応に感謝

今回のターラント訪問にあたっては、準備段階から含めるとほぼ三年以上の歳月が費やされていた。「洋行日誌」の解読作業も含めると、ゆうに十年である。その甲斐もあつてか、今回の訪問では予想以上の成果を収めることができたようである。

本多静六の留学当時の様子を現地で見ることができたことが一番の収穫であるが、それ以上に多くの関係の方々とお会いでき、本当に心のこもった温かな歓迎を頂いたことである。

本多静六も日誌の中で「ターラントの人々は少しも気取るところがなく親切で、誰にでも気安くあいさつをしてくれる」と書き記しているが、今も全く変わらないことが実感できた次第である。

終りに今回のターラント訪問にあたり、いろいろとご指導、ご協力を頂いた皆様のお名前をおあげして感謝の意に代えたいと思う。

東京農工大学名誉教授阪上信次様、金沢大学名誉教授阪上正信様、ドイツ連邦共和国ザクセン州経済振興公社岡野曠二様、同カリン・ハイデンライヒ様、財団法人日独協会織田正雄様、ドイツ連邦共和国ザクセン州日独協会フランク・パウワー様、ドレスデン工科大学名誉教授プロスフェルド博士、ジェット口伊崎捷治様（順不同）。皆様本当にありがとうございました。

編集後記

十四号の刊行に際して、前環境省事務次官太田義武様、野田市役所企画財政部秘書広報課北野浩之様には御専門の立場から本多に関する研究、論説等の御教授を賜わり、お蔭を持ちまして躍如たる情報発信が出来ました事、ここに厚く御礼申し上げます。

平成十四年は、博士没五十年に当り、葛蒲町では記念事業を執り行い、その一端として留学先訪問を企画しました。ところが水害のため一年延期となり、更に昨年は日比谷公園開設百周年記念事業が行われ、これらも含めての編集となり発行が遅くなったことをお詫びします。

訪問事業に参加して、世界林業の発祥地ターラントの町では、大学・行政・市民が一体となつて森の町を守る中で、本多の下宿屋を保存する構想を市長から聞き、一同は奇想の感動と、博士の遺徳に改めて傾倒した次第です。

ミュンヘン大学では、学内の見学だけに留まりましたが、世界学術の殿堂は、不便もあろうが今もそのまま利用されています。

ここに座つて受講している静六青年の姿を想像しながら、ガタガタのドアの取手に触れてみました。窓からは洋杯形の噴水が見え往時を偲ばせてくれました。記念する会 小山千秋

【編集発行】本多静六博士を記念する会
〒346-10192 埼玉県葛蒲町新堀38
葛蒲町役場企画財務課内 電話0480(85)
1111(代) FAX0480(85)6943